

## 【海外学会報告】

# 国際フランコフォニー学会 第31回世界大会参加報告 Conseil International d'Études Francophones (CIÉF) 31<sup>e</sup> congrès mondial, 26 juin-2 juillet 2017, La Martinique

2017年6月26日（月）から7月2日（日）まで、カリブ海に浮かぶ「花の島」マルティニク島のアンティル大学シュール・キャンパスを会場にして、国際フランコフォニー学会（CIÉF）第31回世界大会が開催された。

全体テーマとして「L'île et son autre, la francophonie en Relation」が掲げられ、70あまりのセッションに分かれて250ほどの研究発表があった。そのほか、大会初日の月曜夕方にはマルティニク領土共同体（Collectivité Territoriale de Martinique）<sup>1</sup>の本部でレセプションが行われ、火曜夕方には、ベトナムやラオスの北部山岳地帯に住むモン族でインドシナ戦争後フランスやアメリカ合衆国に移住した家族を追うドキュメンタリー映画「Mémoire hmong à la croisée des chemins」の解説と上映会、水曜午後にはバジュリ（ナポレオンの妃ジョゼフィーヌが生まれ少女時代を過ごしたプランテーション）やラム酒製造所の見学会、そして木曜日には、カリブ海の作家を集めたテーブル・ロンドや、パトリック・シャモワゾーとのランコントロールなどもあり、カリブ海地域のフランコフォニー状況を間近に見ることのできた濃密な1週間だった。

パリ経由（しかもロワシーからオルリーへの移動が必要）で計20時間以上のフライトは楽ではなかったにもかかわらず、AJEQの会員は7名が参加（ただし内2名はモンレアルからの参加）、そのほかの参加者も含めると、日本からは12名、韓国からも7名が参加して、これまでで最多だった。

今年は、会場のアンティル大学が休暇に入るのを待って開催されたため、例年より1か月ほど遅れての開催となり、乾期（carême）と雨期（hivernage）の狭間にあたっていた。日本の梅雨のように一日中しとしと雨が降るわけではなく、雨期の接近を思わせる激しいスコールが数分続いたかと思うとすぐまた晴れたり、狐の嫁入りのような雨が降ることもあったりして、基本的には湿気の多い真夏。空調設備のない教室での分科会は午後になるとやや息苦しいときもあったが、高台の校舎には適度にアリゼ（貿易風）が吹き抜けてくれて、現地の研究者たちや各国から集まった参加者との交流は刺激的だった。

到着した日の晩にまず体験したのが *bruit (chant) de la nuit antillaise*。日が沈むのを待ってカエルや昆虫が大合唱を始め、それが明け方まで延々と続く。コオロギや鈴

虫の音に快く身をゆだねる、などという優雅なものではなく、ホテルの部屋のドアや窓をびっしり閉めてもおお、まるで野宿しているような気分だった。しかし、その「騒音 (bruit)」と思えたものも2日目以降は「歌 (chant)」に変わり、帰国した今となってはなつかしささえ感じる。また、ジョゼフィーヌの生家やバラタ植物園で、カリブ海の作家の作品に登場するさまざまな植物をこの目で見るのができたのも収穫だった。

以下に、AJEQ 会員の研究発表を簡単に紹介したい。

まず、6月27日には、小倉和子（立教大学）が「L'ici et l'ailleurs (1)」と題するセッションの司会をつとめ、その中でみずからも「Quelques réflexions sur les lieux : Yves Bonnefoy, Dany Laferrière et Kim Thúy」と題する発表を行った。ちょうど1年前に93歳で大往生したフランス詩人の「ここと今」に徹底的にこだわる詩学と、「ここ」を離れ、「よそ」を創作の拠点にせざるをえない亡命者や難民としての経験をもつ2人のケベック作家の場所をめぐる思考のあいだに、外見の相違にもかかわらず共通点が存在することを明かにし、それが文学創造の根幹に関わるものであることを論じた。AJEQ 会員ではないが、このセッションでは石川清子（静岡文化芸術大学）、後藤美和子（早稲田大学）も発表した。

6月29日には鳥羽美鈴（関西学院大学）が「D'une île à l'autre (2)」のセッションで、「L'étude de la richesse culturelle de l'île」と題する発表を行い、サトウキビ畑や豊かな海洋資源など、マルチニクと多くの共通点を有する沖縄と琉球諸島を事例に、諸文化とりわけ諸言語の豊さの保持について検討した。まず沖縄の歴史を概観し、続いて現在の沖縄が強いられている負担や海洋資源の危機について言及した。さらに沖縄語の歴史やユネスコによって諸言語が危機言語として指定されている現状を確認した上で、沖縄で定期開催されている言論大会での参与観察を経て得た知見を報告した。同セッションでは、長谷川秀樹（横浜国立大学）も「Politique linguistique minoritaire comparative des îles francophones」と題する発表を行ったが、こちらについては、発表者の意向により概要の紹介は控えさせていただく。

そして、分科会の最終日である6月30日には、まず、Gilles DUPUIS が司会を務めるセッション「Relire Frantz Fanon : ce qui reste de la décolonisation」があった。そこで行われた発表については、ご本人からフランス語による報告が届いたので、以下に掲載させていただく。

Dans sa communication intitulée «*De Peau noire, masques blancs à Nègres blancs d'Amérique : portrait du (demi) colonisé*», Gilles Dupuis (Université de Montréal) s'est penché sur l'influence que l'œuvre phare de l'auteur martiniquais Frantz Fanon a exercée sur la reprise du discours de la décolonisation au Québec, en particulier sur l'œuvre de Pierre Vallières, tout en discutant de la valeur (problématique ou heuristique) qui peut être attribuée aux expressions « colonisé », « colonisateur » et « demi-colonisé » dans ce contexte spécifique.

次の時間帯には伊達聖伸（上智大学）が「Politique linguistique, économie et (post /

néo) colonialisme」のセッションで、「Genèse de la laïcité interculturelle au Québec et sa mise en cause」と題する発表を行い、「静かな革命」以降の時代状況における間文化主義とライシテの展開を踏まえ、2000年代に「間文化主義的なライシテ」が論争含みのものとして成立し、現在再び間文化主義とライシテが別々のものと感受されている向きがあることについて論じた。

そして、最終時間帯、大会のクライマックスには、立花英裕（早稲田大学）が Han Daekyun 韓国ケベック学会元会長が司会を務めるセッション「L'esthétique et la poétique de décolonisation à la Martinique et au Québec」で、「Aimé Césaire et Gaston Miron : poétique de décolonisation」と題する発表を行った。立花の発表は、エメ・セゼールとガストン・ミロンの詩から共通のテーマ（経済的・文化的剥奪）を導きだし、2人の詩人がマルティニクおよびケベックの植民地的状況における文化資本の貧困にどのように立ち向かうことで、新たな詩的言語を創造したかを論じた。また、AJEQ 会員ではないが、澤田直（立教大学）、中村隆之（大東文化大学）も発表した。

その他、プログラムの詳細はこちらをごらんいただきたい。

<https://secure.cief.org/wp/wp-content/uploads/2017/06/Programme>

マルティニクは1946年からフランスの海外県に位置づけられてきた。2015年の地方選挙で独立推進派 Mouvement Indépendantiste Martiniquais のリーダー、アルフレッド・マリ＝ジャンヌ Alfred MARIE-JEANNE がマルティニク領土共同体の首長 Président に選出され、新たな時代を迎えている。今後、ニューカレドニアのように独立に向けた動きが加速するのかどうか、注視が必要だろう。

今回の CIÉF の大会はこれまで以上に開催地の支援（関与）が感じられ、マルティニクの人々がこの大会に込める期待が感じられた。彼らは規範的なフランス語でじつに雄弁に、熱っぽく語る。フランス本土との関わりをどう考えていくべきなのか、自分たちの独自性をどう世界に主張していくのかという課題は、ケベックの状況とも大いに重なりあう。とりわけ、エメ・セゼールやエドゥアール・グリッサンの存在の大きさを感じさせられた1週間だった。

アンティル大学講師のマニユエル・ノルヴァ Manuel Norvat 氏に大変お世話になったことも付記しておきたい。大会終了後に彼と、人類学者ウィリアム・ロール William Rolle 氏の案内で行われたマルティニク「秘境巡り」は圧巻だった。私たちは2台の車に乗り込み、シュルシェール市からサン・ピエール市に向かって北上しながら車による散策を楽しんだ。途中、火炎木やフロマジエの大木が並んでいる海岸を調査し、いまでも習慣が残っている呪術の痕跡を砂浜に並んだ石に読み込んだり、木の実を採集した。サン・ピエール市近くでは、長年森の中に暮らしているフランス人の婦人の家を訪問。熱帯植物の様々な相や、彼女が手作りで飾った家を見学させていただいた。シュルレアリスムを思わせる独特の美的感覚が充満する室内に私たちは息を呑む思いだった。アンドレ・ブルトンの娘オーブも、この秘境の家を訪れたという。

来年の大会はラ・ロシェル（フランス）で6月4日から9日まで「*Passage : méditation et transition*」という主要テーマのもとに行われることが決定している。  
(小倉和子 立教大学／立花英裕 早稲田大学)

注

- 1 2010年1月の島民投票を経て、2015年12月に発足した地方自治体組織。憲法73条に基づきフランス本土とは異なる一定の自治権をもつ。訳語はまだ一定していない。